慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	人工共通語希求の内発性と外発性についての一考察
Sub Title	On the internal and extrinsic motivations for controlled language innovation
Author	穐元, 美咲(Akimoto, Misaki)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2017
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.112, (2017. 6) ,p.236 (11)- 246 (1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01120001-0236

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

人工共通語希求の内発性と外発性についての一考察

穐元　美咲

本論の目的は、現在に至るまでに考案されたさまざまな人工英語または言語について概観し、言語をとりまくコミュニケーションの生態系と共通語への理念的、社会的要請との観点から、それらの成り立ちを批判的に考察することである。高尚な理念のもと、いわば内発的な動機付けによって創造された人工英語（言語）は期待されていたほど普及しなかった。その一方で進行している、インターネットテクノロジーの進化といわゆるグローバル経済の進展にともなって近年見られる英語の動きに着眼したい。企業の多言語展開で用いられるグローバルテクスト（Global Text）は、人工共通語（制限言語）への理念なき胎動であり、それに対しては現代の言語・コミュニケーションを取り巻く環境が生み出した言語アウェアネスの変化という視点が有用であることを主張したい。

“共通語”の試みと動機付け

いわゆる国際的な舞台で英語が「国際語」となった歴史はそう古くはない。18世紀、19世紀において「国際語」と呼びうるような国家間の公的な言語活動はフランス語でなされており（18世紀のラシュタット条約、19世紀のウィーン会議など）、17世紀におけるそれはラテン語であった（ウエストファリア条約（1648年）など――そもそも「ウエストファリア」はラテン語読みである）。しかしながら、英語の「国際語」としての地位の規模と強固さは、歴史上類のないものである。17世紀から19世紀にかけてのフランス語は一見それに比類する地位にあるかのようにも見えるが、あくまでその地位はほぼヨーロッパという局所

的なものであり、いわゆる支配階級の言語だった。

現在に到るまで“共通語”の成立を目指した人工言語が発案されて、英語の改良運動も多く存在したが、これらは国境を越えた言語活動が格段に増えたことの現れであると同時に、英語の圧倒的存在の大きさの裏返しである。英語改良運動としては、古くはオグデン（C. K. Ogden, 1889-1957）とリチャーズ（I. A. Richards, 1893-1979）によるベイシック・イングリッシュ[1]と技術的マニュアルのために考案されたSimplified English、ジョージ・バーナード・ショー[2]（G. B. Shaw, 1856-1950）による表記と音韻を一致させようとしたフィッシュ（Ghoti）、比較的最近のものではジャン・ポール・ネリエール（J. P. Nerriere）らによるグロービッシュなどがある。また、英語に依存しない、“共通語”の試みとしておそらく最も知られたものとしてザメンホフによるエスペラントがある。

人工改良英語の中で初期のよく知られたものは心理学者・言語学者のK. オグデンと文芸批評家でオグデンの提携者のI・リチャーズが考案した、ベイシック・イングリッシュ[3]である。その語彙数をまず850語に制限し、一般にあまり知られていない語彙をやめ、よく知られている単語を組み合わせて使うというものである。たとえばdescend（降りる）はcome downに、participate（参加する）はtake partに置き換えるなどである（田中, 2007: 26）。第二次大戦後、世界平和の手段ともてはやされた時期もあった。また、改良英語の他の試みの一つとして、J. P. ネリエールらのグロービッシュ[4]がある。グロービッシュは国際的なビジネスの場で非英語母語話者にとって不利益にならないよう、1500語の語彙とその派生形、句動詞（put offなど）に改良し、英語習得を容易にし、コミュニケーションの道具として考案された。一般的な英語母語話者の習得語彙数は7,000～8,000とされており、そのコミュニケーションの8割は2割の語彙数でまかなわれるという計算に基づいている。ベイシック・イングリッシュはどちらかというと学習者志向、グロービッシュはビジネス志向だが、その成り立ちはいずれも理念主導といえるものだった。それは使用者、学習者に対する内発的な動機付けを高めようとするそれぞれの改良英語の導入からもうかがい知ることができる。

一方で英語に依存せず、新たに“共通語”を生み出そうとした試みも存在する。エスペラントは世界で最も広く、そして多くの話者を獲得した人工言語である。ポーランドのユダヤ人眼科医ルドヴィーゴ・ラザーロ・ザメンホフが1887年に創案したエスペラント発案の目的は、ある特定の言語に依らず、学習者の学びや

すさを最優先し、学習者の言語に関わらず国際的なコミュニケーションの手段として用いやすいものにするというものだ。つまり英語を学習する際の、非英語母語話者の負担を軽減し、母語話者との格差を埋め、より円滑にコミュニケーションを図ることを目指した。エスペラント語の発音体系はスラブ語の影響を受けているが、語彙は主にロマンス語（フランス語・スペイン語等、約75%）、ゲルマン語（ドイツ語・英語等、約20%）から採用している。文法はわずか16項目の原理によって成立し、語彙変化に例外もなく、発音も表音式でわかりやすいと言われている。エスペラント語は現在のところ、200万人[5]の話者がいると言われている。The World Esperanto Associationは、120カ国5500人以上の会員がいるとしており、ヨーロッパ、東アジア、南アメリカを中心に使用者が分布しているという。これも理念主導型の人工語であり、エスペランティストの中にはザメンホフの思想に共鳴した内発的な動機付けの高いものも少なくないという。

人工言語の話者数としては驚異的とも言え、どんな“共通語”の試みよりも成功したように見えるエスペラントであったが、現代社会における英語に対しては、第二言語としての英語に限ってみても、その話者の数も広範囲の使用エリアという点についても、決して対等とは言い難いであろう。また、学習者の負担を考慮したエスペラントは、学習しやすさという点では英語よりも習得しやすいということになっているが、やはりヨーロッパ語が基盤となっているのは明らかだ。

こうした非母語話者に配慮した改良英語や人工語を差し置いて、英語はいわゆる国際語として地球上を席巻した。この状況を生み出した要因としては、英米の強大な国力は置くとしていくつか挙げられるが、そのひとつとして、ひと言で言えば理念主導の試みには限界があるということなのだろう。それはいわば内発的な動機付けの限界でもある。確かに、どんな共通語への試みよりも多くの話者を獲得し、第二世代と呼ばれる母語話者まで誕生しているエスペラントは共通語として失敗したとは言えない。共通語となる特定の言語の母語話者と非母語話者との言語的不均衡を是正することを最大の目的としていたザメンホフの試みは部分的には成果をあげていると言える。その崇高な構想は非母語話者にとってまさに理想の言語であった。しかしこの理念主導の試みは、現代社会の外発的動機付けには抗いがたいものがあるといわざるをえない。

今や世界の“共通語”となっている英語は地理的境界や時間の概念などないか

のように振る舞い、使用地域や使用領域に応じて変化や広がりを見せている。加えて、経済やテクノロジーのグローバル化に伴い、英語の使用とそれに伴う新たな動きは急速に増加している。英語がその使用者を増やし続けている状況を経済とテクノロジーとの関係で見る視点は重要である。英語の使用場面は言うまでもなく多様だが、言語と経済やテクノロジーの緊密な結びつきを考えると、世界や社会、そして一個人の学習者にとっての動機付けは外発的であり、かつ、きわめて強固である。いわゆるグローバル経済の今日において、商取引や経済的な契約を結ぶことも、SNS等からメッセージを発信することも、いまやインターネットテクノロジーを抜きにしてはありえない。そして、英語は圧倒的なインターネット言語でもある。

英語の状況と英語帝国主義のパラドクス

ここで一度世界における英語の現状に立ちもどろう。現在、田中・田中（2011）によれば、英語は、イギリス、アメリカ合衆国、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカ、アイルランドなどにおいて、約3億5千万人の母語として使用されている。また、「インド、パキスタン、マレーシア、シンガポールなどの国々で、4億人以上の人びとに第2言語及び公用語として使用されている。」（田中・田中, 2011: 20-21）。 Kachru（2007）によれば、このような英語の状況は、内心円（Inner Circle）、外心円（Outer Circle）、拡大円圏（Expanding Circle）の３つの同心円によって捉えることができる。内心円とは、イギリスやアメリカ、オーストラリアなど、英語が主要言語として使用されてきた地域である。外心円はインド、ナイジェリア、フィリピン、シンガポールなど、かつてイギリスとアメリカによる植民地であった地域であり、英語が行政、教育、法律などのために公用語として使用されている地域だ。拡大円圏では、中国や日本、ヨーロッパなどのように、英語が国際的なコミュニケーションの手段、学習言語として使用されている。

英語が国際共通語であるということはもはや否定しようのない事実であるが、そのことに反対する者も少なからず存在する。いわゆる英語帝国主義論者たちは、かつての人工言語考案者らと同様に、英語が共通語であることによる非母語話者の不利益を主張する理念主導型の論者たちである。確かに、母語話者と非母

語話者の間には英語を習得する際、母語として接触するか、または第二外国語として接するかで大きな違いが生まれることは言うまでもない。問題は、世界中で多くの人々が英語は共通語であるという認識を強要され、非母語話者は英語を習得しなければならないという強迫観念にとらわれる状況におかれるということだ。津田（2006）によれば、このような状況は母語話者に有利であるのは明白で、非母語話者は英語支配下ではプレッシャーや劣等感と同時に「英語信仰」に苛まれるコミュニケーション弱者である。（津田 , 2006: 46）

このような議論に対し、唐須（2007）は、実際、アメリカなど不自由さなど微塵も感じることなく英語を使いこなし、活躍している非母語話者は大勢いる状況を考えると、彼らはコミュニケーション弱者などには必ずしも当てはまらないとしている。また、多くの英語圏で起こっていることだが、英語を習得した方がよりよい職に就けるがゆえに、幼い頃から英語環境に子を置こうとする積極的な対応も見られ、そのこと自体は英語帝国主義論者からすれば、間接的な、いわば「内から」の支配とされるであろうが、心理的圧迫感のような捉え方をするのは必ずしも現状にあっているとは限らないだろう。さらに言えば、アフリカなどの少数言語が多数存在する国において、少数言語を維持できている要因は英語などの大言語があるからである。一般に描かれやすい大言語英語が少数言語を押しつぶすという図はすべての地域に当てはまるわけではないようだ[6]。

母語話者と非母語話者の格差に対してこうした議論が巻き起こるのは、英語がこれまで以上に強固に共通語の地位を獲得していることの反映ととることもできよう。それはまた内発的な動機付けと外発的なそれとの葛藤でもある。英語帝国主義のパラドクスは、非英語母語話者の叫びは英語で発信しなければ、基本的には自国以外の誰にも耳を傾けてもらえないということだとされてきた。反英語帝国主義論者に自己満足的との誹りを浴びせられてきたところだ。しかしながら、次節の議論をふまえて考えると、その状況はいずれ変わる可能性がある。英語帝国主義論の是非はともかくとして、この議論を取り巻く状況は新しい英語の時代のひとつの象徴となるかもしれない。

グローバルテクスト

人工言語、人工英語、英語帝国主義に表れる英語に対する時代認識とも呼ぶ

べきものは理念主導型の内発的動機付けに関わる思想が根底にあることを概観した。その一方で、特にいわゆるグローバスビジネスの世界においてもある種の“標準化”とも思える変化が生じている。グローバルテクストと呼ばれる、主として機械翻訳、重訳（relay translation）に最適化したスタイルの英語が急速な広がりを見せている。前述したように、英語は単なるコミュニケーションの道具というだけでなく、経済や政治、テクノロジーの分野と深く結びついている。改良英語やエスペラント語に代表される人工語は、英語によるコミュニケーションの障壁を取り除こうとした理念的試みであった。しかし、いま起こっている英語の標準化はコストパフォーマンスへの意識に根ざしたいわば経済主導の変化であり、インターネットテクノロジーが生み出したものだ。それはすなわち外発的な動機付けによるものである。井上（2014）によれば、「グローバルビジネスの世界ではある種の標準化の方向でグローバル化が進んでいる。英語の歴史においても現代の短いスパンでの変化を見ても、対人関係を含めた社会のありようやテクノロジーの変化が言語と言語使用に大きな影響を与えていることは明らかであるが、ビジネスの形態や経済もそれとは無縁ではない。」（井上, 2014: 272）ここでの意識は、対話者が英語話者であるとか母語話者か非母語話者であるとかなどは問題ではない。いわゆるグローバルビジネスにおいて多言語展開する多くの企業の強いニーズ[7]は言語の異なる相手とのやりとりや自社の製品に添付する取扱説明書などのビジネス文書において機械翻訳を利用して迅速に低コストで効率的に多言語展開を行うことである。多言語展開を行う場合も英語を介してさらに他の言語に機械翻訳するという「重訳」もいまやこの種の業務では常識となっている。一般的にインターネットを介して利用される機械翻訳には、多くのユーザーは満足感を得ていないかもしれないが、グローバルテクストの動きは、つまるところ、機械翻訳の不完全さを嘆くより、自らの英語を機械翻訳に適応させようという意識の変化である。言うまでもなく、機械翻訳は、デジタルテクノロジー、インターネットテクノロジーと結びついている。この問題は、たんなるビジネスの世界の慣習の変化ということにとどまらない。機械翻訳、重訳に最適化させたスタイルの英語が意味するところは、我々の言語活動がデジタルテクノロジーに最適化させられているということであり、その動機付けは強固に外発的なものである。

グローバルテクストの一事例

ここでグローバルテクストの一端を見てみよう。グローバルテクストは基本的にグローバル英語（Global English）[8]である。Kohl（2008）ではグローバルテクストとは何かについて説明している。またグローバルテクストは、特にビジネス文書に使われる英語を幅広い読み手にとって「わかりやすさ（readability）」の高いものにし、機械翻訳も含めて翻訳しやすい（translatable）ものにしたものである。そのために、Kohl（2008）は以下のようなガイドラインを提案している。

・翻訳の妨げとなるあいまいさを排除する
(eliminating ambiguities that impede translation)
・非母語話者（たとえかなり英語に堪能でも）が見慣れないと思われるめずらしい非専門語や普通ではない文法構造を排除する
(eliminating uncommon non-technical terms and unusual grammatical constructions that non-native speakers (even those who are quite fluent in English) are not likely to be familiar with)
・英語の文構造をより明確にし、非母語話者も分析し理解しやすくする
(making English sentence structure more explicit and therefore easier for non-native speakers (as well as native speakers) to analyze and comprehend)

・不必要な矛盾を排除する
(eliminating unnecessary inconsistencies)

（Kohl 2008: 2）[9]

難解な単語や文法構造を避け、語や文法によって生じる曖昧性を取り払うこと、つまり理解と翻訳の両方の面での「わかりやすさ」を追求している。さらに見ると、関係代名詞のその修飾先（つまり先行詞）があいまいであることはよくある。

(1-a) If you change chapters of a document **that someone else has checked out**, you won't be able to save your changes.

that以下で修飾される可能性がある先行詞はchapters と documentの両方が考えられる。グローバルテクストではこのようなあいまいさを避けるために、以下のように提案する。

(1-b) If you change chapters that someone else has checked out, you won't be able to save your changes.

(1-c) If someone has checked out a document, then you cannot save any changes that you make to any chapters of that document.

(Kohl, 2008: 86)

また、文法構造や構文そのものを正確に判定できなくなるという事例も生じる。技術的文書のなかでは、動詞appearは"become visible"という意味で使われることが多い。しかしappearがto不定詞と共起すると、その文書の作成者の意図には反して、「～のようだ」に解釈され、ほぼ同等の意味を持つseem toと誤解されかねない。

(2-a) The Message Display window appears to indicate how many records were actually inserted into the new table.

幅広い層の読み手にとっての「わかりやすさ」を追求するグローバルテクストでは、これも回避すべきことなのだ。そこで(2-b)のように、appearとto不定詞を切り離し、appearが「～のように」ではなく、本動詞として"become visible"に解釈されるようにしてある。

(2-b) The Message Display window appears. This window indicates how many records were actually inserted into the new table.

(Kohl, 2008: 67)

以上で見てきた通り、グローバル英語という取り組みはすでに進行中であり、実際にビジネスの現場で需要がある。ただ従来の人工語・改良英語と異なる点につ

いて、井上（2014: 275-276）「グローバル英語では「避けられるべき（should be avoided）」語彙や文構造により強調がおかれ、制限英語は「許される（allowed）」ものの目録という色彩が強い。」述べている（井上 , 2014: 275-276）。グローバル英語はあくまでも「避けるべき」語彙や文構造を提案しているため、制限としては緩い。一方で、改良英語は使用が「許される」語彙や表現を提示しているので、強い制限を話者に対して行なっているこの「緩さ」は、基本的に作業がデジタル化されていることに起因していると考えてよいだろう。人間の改良英語は、人間が使うものゆえに、習得の負荷をさげることを意図している。それに対してグローバル英語は、コンピュータ処理を想定しているがゆえにそのような負荷を考慮する必要がない。この点においてもテクノロジーが生み出した英語といえよう。

おわりに

英語は、さまざまな要因によって変化をとげてきた。それは英語の歴史を振り返ってみれば明白である。英語はその歴史において、何度かの大きな言語接触、言語変革を経験してきた。1066年のノルマン征服は政治的な変革に起因するものであるが、政治、法律、軍事、宗教、ファッション、食文化、学芸などあらゆる分野にフランス語が侵入し、英語の語彙に大きな変革をもたらした。また15世紀中盤のウィリアム・キャクストン（William Caxton, 1422-1491）がイギリスに印刷機械を導入し、活字印刷を発達させ、英語の標準化と綴りの統一に大きな役割を果たしたのは印刷術というテクノロジーによる言語変革である。シェイクスピアの登場による言語変革は演劇というメディアが生み出したものという面がある。言語の変化は、その言語を取り巻く社会やコミュニケーション、テクノロジーの変化によって引き起こされる。グローバル英語は経済とテクノロジーが生み出した言語変革である。井上（2014）「グローバル英語は、国際ビジネスの広がりという社会の変化と機械（自動）翻訳の普及というデジタルコミュニケーションテクノロジーの変革がもたらしたのだ。すなわち、社会が生み出した一つの社会言語学的産物なのである」と指摘している。（井上 , 2014: 280）

このように、歴史上のこれまでの英語の変化と同様に、グローバルテクスト、グローバル英語も社会やテクノロジーの要請によって生み出された変化である

と言える。視点を少しずらせば、World Englishesにみられるような英語という言語多様化と表裏一体ともいえる社会言語学的事象であり、強い外発的動機付けによって生み出されている言語活動なのである。英語帝国主義論のようなこれまで「内向き」の自己満足的な言説と批判されてきたパラドックスも、いま進行しつつあるテクノロジーの進化によって解消されることもありえない話ではない。すでに多くの人たちが実践しているように、どんな言語のテクストもネット空間にあるかぎり、あるいはデジタル化されている限り、機械翻訳を介して「だいたい」理解できるし、そのように読まれている。「だいたいの理解」が新しいインターネット社会の言語活動の一面なのかもしれない。

註

1. Ogden, Charles Kay (1930) *Basic English: A General Introduction with Rules and Grammar*. Paul Treber.
2. 本人は否定していると言われているGhoti < https://ja.wikipedia.org/wiki/Ghoti#cite_note-3>（参照, 2016-12-20）
   現在該当の記事が閲覧することができないため、真相は不明のままである。
3. Basic Englishと表記され、British American Scientific International Commercialの頭文字をとった略語である。（田中, 2007: 26）
4. Nerrire, Jean Paul. And Hon, David (2009) Globish the World Over. International Globish Institute. を参照。
5. エスペラントに関わるデータ（母語話者数など）は以下のサイトから引用している。Esperanto <https://en.wikipedia.org/wiki/Esperanto>（参照, 2016-12-02）
6. 梶（2017）参照。
7. この企業の要請に応えようとしているのが、テクニカル・コミュニケーション（Technical Communication）と呼ばれる分野で、「企業の製品の取扱説明書やマニュアルなどのビジネス文書の質的向上」（井上, 2015: 30-31）を目的としている。
8. テクニカル・コミュニケーションにおけるグローバル英語とはグロービッシュに代表される改良英語のことを意味するわけではない。
9. 日本語訳は井上（2014）を参照。

参考文献

井上逸兵（2005）『ことばの生態系 ── コミュニケーションは何でできているか ──』慶應

義塾大学出版会
――――（2014）「グローバル英語とテクノロジー ―― コミュニケーションの生態学的試論」慶應義塾大学大学院英米文学科『コロキア』35号 . pp.272-282.
――――（2015）『グローバルコミュニケーションのための英語学概論』慶應義塾大学出版会
Kachru, Y. and Larry, E. S. (2008) *Cultures, Contexts, and World Englishes*. Routledge.
（井上逸兵・多々良直弘・谷みゆき・八木橋宏勇・北村一真：訳『世界の英語と社会言語学』慶應義塾大学出版会）
梶茂樹（2017）“無文字社会の文字的コミュニケーション ―― アフリカでの言語調査から ――”（2017-01-22.「言語の多様性はなぜ必要か ―― 少数話者（危機）言語の研究支援と言語の多様性に関する意識啓発 ――」記念講演資料）主催：NPO法人地球ことば村・世界言語博物館 . 共催：日本言語学会、慶應言語教育研究フォーラム .
Kohl, John R. (2008) *The Global English Style Guide: Writing Clear, Translatable Documentation for a Global Market*. SAS.
Nerrire, Jean Paul. And Hon, David. (2009) *Globish the World Over*. International Globish Institute
Ogden, Charles Kays. (1930) *Basic English: A General Introduction with Rules and Grammar*. Paul Treber
田中克彦（2007）『エスペラント ―― 異端の言語』岩波書店
田中春美・田中幸子 編（2011）『World Englishes ―― 世界の英語への招待』昭和堂
唐須教光（2007）『英語と文化 ―― 英語学エッセイ』慶應義塾大学出版会
津田幸男（2006）『英語支配とことばの平等 ―― 英語が世界標準語でいいのか？』慶應義塾大学出版会